

【論 文】

独居後期高齢者の将来を見据えた生活支援ニーズに関する研究

—本人が語る不安と希望の分析から—

佐藤 惟*

要旨：高齢多死社会を迎えつつある中、地域包括ケアシステムにおいては「人生の最期まで」のサービス提供体制が目指されている。本稿では同システムの重要な構成要素でもある「生活支援」に着目し、独居の後期高齢者自身が語る不安と希望から、人生の最期までの見通しを持つための「将来」を見据えた潜在的な生活支援ニーズを探った。

内容分析の手法を援用し、インタビューデータを先行研究と比較検討しながら分析した結果、①生活の基盤ニーズ、②地域生活支援ニーズ、③人生の統合・死後の安心ニーズという、大きく3つのニーズが見出された。独居後期高齢者にとって、「将来」とは「人生の最期」から「死後」までを含む概念であり、同世代の友人やきょうだいとの死別体験が、そのような意識に強く影響を与えていることが伺われた。現在の生活困難だけではなく、死後のことまでを視野に入れた生活支援の体制を確立する必要性が示唆された。

Key Words：独居後期高齢者、生活支援ニーズ、不安、希望、質的内容分析法

I. 緒 言

日本社会では人口の高齢化と世帯の小規模化が進み続け、今後20年ほどの間に「独居」で「75歳以上」という、二重のリスクを抱える高齢者層の急増が予測されている（国立社会保障・人口問題研究所 2014:16-7）。かつて高齢者の生活を支えてきた家族や地域社会の絆が薄れている中、地域の中で孤立して生活困難に陥る高齢者はすでに続出しており、このような社会的リスクに対応するため国は2011年、地域包括ケアシステムの理念を強く打ち出した。そこでは「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される」サービス提供体制の構築が目指されている（厚生労働省 2014）。

ところで、前述したような家族や地域社会の変化は国や自治体による対応の必要性を喚起しただけではなく、高齢者一人一人に対しても、自らの老後、さらには人生の終わりの

2014年12月24日受付／2015年10月12日受理

*日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程

迎え方に関する意識の変革と行動を迫っているようである。袖井（2009:11-42）は長寿化が進んだ現代において高齢者が「老いのプラン」をつくることの重要性を説き、さらには「死や死後といった、もっと先までの設計図を自分で描くこと」までが求められるようになってきたと述べている（朝日新聞 2013. 4. 20 朝刊）。

高齢者自身の将来に対する不安も増している。内閣府（2010:9-26）の調査では、60歳以上の高齢者で日常生活全般に「満足」と回答した者は8割強に上る一方、将来の日常生活に「不安を感じる」と回答した者も7割を超え、過去10年間で「不安」と回答した割合が増加傾向にあることが指摘されている。すなわち、多くの高齢者が「現在の生活」には一定の満足を覚えつつも、「将来の生活」に不安を感じているということである。このような高齢者の将来に対する不安は単なる老後の生活不安にとどまらず、「人生の最期をどのような形で迎えるか」という、死に関する不安ともつながってきているようである。近年社会問題となっている「孤独死」について自分と無関係ではないと感じている高齢者が増えており、特に独居の高齢者にとって、その不安は切実である（清水 2011）。

地域包括ケアシステムの構築に当たっては「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けること」が目指されている。しかしこのような理念の実現はまだ道半ばであり、これから急激に増えていく独居後期高齢者の生活を「人生の最期まで」支えるには、袖井の言う「死や死後といった、もっと先までの設計図」を一人ひとりがしっかりと描けるようにして、不安を払しょくしていくことが必要だろう。本研究の出発点は、一人ではこうした将来の見通しを持つことが難しい要援護高齢者への様々な支援を、地域包括ケアシステムが標榜する「生活支援」の一環として、提供する必要が生じてきているのではないかという問題意識である。このような観点に立てば、高齢者の生活支援ニーズとは今、現在のものだけにとどまらず、「将来」までを見据えて把握する必要がある。以上を踏まえ本研究では、独居の後期高齢者が人生の最期までの見通しを持って今後の生活を送るために、どのような生活支援ニーズを有しているのか明らかにすることを目的とする。

II. 用語の定義と分析視角

1. 本研究における「生活支援」のとらえ方

一般に「生活支援」という時に想定されるのは、調理・買い物・洗濯などの家事援助や、見守り、安否確認、外出支援、社会参加支援活動、日常的な困りごと支援であるとされる（地域包括ケア研究会 2013:17）。東京都福祉保健局（2010:22）の「日常生活支援サービスの利用状況」でも、家事援助、配食サービス、外出支援、通院の付き添い、緊急通報システム・火災安全システムの設置、ゴミ出し等が上位に挙げられている。

一方、古川（2007: iii）は「現代社会の複雑で高度な生活問題に対応する」ために「生活支援」という概念をマイクロレベルにとどまらずより広義の意味でとらえ、人権擁護、健康、雇用・就労、所得保障、医療、住宅政策等を含む、メゾ、マクロ各レベルを通じての「包括的・総合的な生活支援」を展開していく必要を述べている。本研究においても、独居後期高齢者が抱えるニーズが多様化していることを考え、古川の定義をもとに「生活支援」を広義の意味でとらえていく。

2. 分析視角

「人生の最期までの見通しを持って、安心して今後の生活を送るために必要な生活支援のニーズ」を「将来を見据えた生活支援ニーズ」と呼ぶことにする。本研究ではこのようなニーズを明らかにするため、平岡(2011:428-9)の潜在的ニーズに関する議論を参考に、本人が語る「不安」と「希望」からアプローチするという手法を取った。

平岡によれば、ニーズが潜在化している状態には「専門的な観点から見ればニーズがあるのに、本人が自覚していない状態」(状態A)と「本人がニーズを自覚している、何らかの理由でサービス利用の申請を行っていない状態」(状態B)の2種類があるという。近年増加傾向にある高齢者の「将来に対する不安」は今、目の前で生活困難が生じているわけではないという点で、専門的な観点からはニーズとして把握されにくいかもしれない。しかし、本人が感じる主観的ニーズもまた重要であること(武川 2011:63-81)を考えると、これらは「状態B」に当たるような、潜在化しているニーズと捉えることができる。ここで「潜在化」というのは、単に現在、サービスに結び付いていないというだけでなく、「将来」という時間軸の先にニーズが潜在的に存在していることも指す。

さらに、「将来に対する不安」は多くの場合、「将来への希望」と表裏一体のものであると考えられる。例えば、「自分は孤独死するのではないか」という不安を抱えている人は、裏を返せば「孤独死ではなく、誰かにそばで看取ってもらうなどして、別の形で死を迎えたい」という希望を意識の底に持っていると考えられるだろう。同様に、「いつまでも健康で暮らしたい」という希望はその実現が脅かされた時、「身体的不安」に転ずると言える。介護保険制度の導入以来、「利用者主体」を理念とする支援の現場では「本人および家族等の意見・要望」をアセスメント項目に含むようになっており、支援対象者本人が抱く希望を把握することの重要性は増している。小松(2011:43)はストレングスマodelの影響に触れながら「ニーズを、必要として理解するか、希望として理解するか」と述べており、「将来」という時間軸の先にある潜在的ニーズを捉えるに当たり、本人が語る希望からもこれを探ることには一定の意義があると考えられる。

Ⅲ. 先行研究

独居高齢者の日常生活上のニーズについては、河合(2009:99-144)が詳細に明らかにしている。また、独居高齢者を対象とする調査は沖縄県読谷村(2006)、葛飾区(2009)、武蔵野市(2011)、摂津市(2011)、山形県(2012)等、近年各地で行われており、本研究の視点に沿ってこれら先行研究の傾向をまとめれば、①主に日常生活上の困りごとやソーシャルサポートの観点から分析がなされていること、②「日常生活上の困りごと」については「家事」「買い物」「外出」等の項目が上位に挙がっているが、最も多いのは「特に困っていることはない」という回答であること、③自由記述に「将来の生活に対する不安」に関するものが数多く見られるが、分析は補足的なものにとどめられていること、を指摘することができるだろう。「将来的な不安」に言及した数少ない調査報告として新潟市中央区社会福祉協議会・新潟県立大学(2011:80-1)があり、ここでは自由記述に見られた不安の内容を「入院」「施設入所」「孤独死」「お墓」「献体」の5つに分類して提示している。

独居後期高齢者を主たる対象として取り上げた研究はまだ少ないが、高齢者本人にインタビューを行った研究として小山ら(2009)や松成(2003)があり、健康や跡継ぎに関する

る不安、土地・家屋・墓の子世代への継承希望、住み慣れた土地で暮らし続けることの希望などが報告されている。上記2つの研究が「過疎農山村地域」「地方都市」をフィールドとしたものであるのに対し、直井（2005）の研究は独居後期高齢者に対象を絞ったものではないが、大都市に住む高齢者が抱える可能性の高い老後不安を「住宅」「外出」「経済」「孤立」「介護」「その他（災害、犯罪等）」の6つに分けて論じた。高齢者の持つ希望に関しては小泉ら（1999）による研究があり、「健康」「長生き」「自己実現」「家族・仲間との交流」などが示されているが、こちらも高齢者一般を対象としたものである。

以上のように、独居高齢者のニーズを扱ったこれまでの研究は主に日常生活上のニーズに焦点が当てられていた。「将来への不安」については自由記述部分で多く語られており、一定の目配りがなされてきたが、高齢者の不安が増してきている社会の現状を考えると、この点に特化した研究もまた必要であると考え。「独居後期高齢者」という属性を持った人々は、その置かれた社会環境やライフステージを考えると「高齢者一般」で捉えた時には見えにくいニーズを抱えている可能性があり、さらなる研究蓄積が求められている。

IV. 研究方法

1. 対象

本研究の分析に用いたデータは、筆者が東京都内にあるA地域包括支援センターの協力を得て行った独居高齢者調査に基づいている。この調査では「65歳から90代までの独居高齢者で、認知症の診断を受けておらず、基本的なコミュニケーションに問題のない方」という条件を指定して調査協力者の紹介を依頼し、8名から賛同を得て将来に関する意識調査を行った。このうち本研究では75歳以上の7名を分析対象とした(表1)。

表1 分析対象者の属性

ID	年齢	性別	住宅状況	独居歴(きっかけ)	結婚歴	子の有無	血縁のサポート	近隣との交流	介護サービスの利用状況
No.1	88	男	都営	約50年(死別)	有り	なし	弟(月に1回程度)	なし	拒否により利用中止(生活援助)
No.2	87	女	都営	19年(死別)	有り	なし	弟(月に1回程度)	アパートの友人と交流(毎日)	通所介護(週1日)
No.3	83	女	持家	30年(死別)	有り	なし	なし	なし	生活援助, 訪問看護(週6日)
No.4	88	男	都営	5年(死別)	有り	なし	なし	アパートの住人と挨拶(毎日)	利用なし
No.5	83	女	都営	2年(死別)	有り	なし	姪(随時)	アパートの友人と交流(毎日)	生活援助(週2日)
No.6	82	男	持家	10年以上(姉の入院)	なし	なし	なし	なし	利用なし
No.7	78	男	民間賃貸	10年以上(離婚)	有り	有り	なし	なし	生活援助(週2日)

2. 調査内容与方法

インタビューは、調査対象者の自宅またはA地域包括支援センターを運営する法人施設内の一室で行った。調査内容は、まず基本情報として年齢、独居歴、独居になったきっかけ、家族・近隣との交流状況等を尋ねた。その上で、主要調査項目として①将来に対する不安とその内容、②将来への希望とその内容、③不安解消・希望実現に向けた自助努力の内容を尋ねた。インタビュー時間は1人40～80分、調査期間は2013年8月～10月である。

調査・分析に当たっての倫理的配慮については、まず協力先であるA地域包括支援センター所長に対し、書面および口頭にて本研究の趣旨を説明し、同意を得た。インタビュー対象者には、研究目的や個人情報の取り扱い、調査参加および回答の任意性等について書面と口頭で説明し、全項目について同意を得た上で、インタビュー内容をICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。なお、本研究は日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(受付番号:13-0310,承認日:平成25年7月25日)。

3. 分析方法

Mayring (2000) や Elo & Kyngäs (2008) を参考に、質的内容分析の手法を援用してデータ分析を行った。質的データの分析に用いられることの多いグラウンデッド・セオリー法(以下GT法)と質的内容分析法は共通点も多く、その違いがこれまで十分認識されてきたとは言いがたいが、GT法の分析プロセスが帰納的方法に特化したものであるのに対し、質的内容分析法では概念主導の演繹的方法と、データ主導の帰納的方法を柔軟に組み合わせられるのが特徴であるとされる(乙幡2014, Cho & Lee 2014)。しかし実際には、質的内容分析法を用いたとする国内外の論文も大半は帰納的方法を用いており、既存の理論を枠組みに活用した演繹的方法の論文が少ないことが報告されている(乙幡2014)。本研究では、先行研究等で指摘されてきた高齢者の不安と希望の内容を基本的な分析枠組みとする、概念主導の演繹的手法を原則として採用し、既存の枠組みで捉えきれない部分については、帰納的にコードやカテゴリーを創出するという方法をとった。

具体的な手順としては、①まず逐語録の中から本研究の視点と関わる部分に着目し、オープンコーディングを行う。ここではできる限り対象者の語った言葉をそのままコードとして採用し、語りが長い場合には日常語によるコーディングを行った。②次に、対象者間のデータを比較しながら、同様の内容であると判断したものを集合させ、オープンコードの上位の意味をもつコードをつけた。③さらに、コード間の関係を検討しながら、サブカテゴリー化を行った。④この作業を繰り返し、サブカテゴリーの上位にあるカテゴリーを生成していった。②～④の作業においては、質的内容分析方法の演繹的な分析枠組みとなる先行研究との比較検討を繰り返し行った。

具体的な分析の視点として、不安に関するところでは直井(2005)、内閣府(2010:9-26)、新潟市中央区社会福祉協議会・新潟県立大学(2011:80-1)などを参考とした。希望に関しては小泉ら(1999)による研究のほか、荒木ら(2010)の終末期の過ごし方の希望に関する研究と、経済産業省(2012:8-15)にも着目し、重要な分析の視点とした。分析の信頼性および妥当性を担保するため、カテゴリー生成に際しては高齢者福祉の研究者および実践家に意見を求め議論し、必要に応じて修正を行った。

V. 結果

分析の結果13のコードが見出され、そこから7つのサブカテゴリーを生成した。さらにそれらを最終的に①生活の基盤ニーズ、②地域生活支援ニーズ、③人生の統合・死後の安心ニーズという、3つのカテゴリーへと集約した。質的内容分析法では、膨大な量のテキストから研究目的に沿って重要部分を抽出する「データの縮減」が分析目的の1つとなるため(Cho & Lee 2014)、見出されるコード数は必ずしも多くなならない。また、本研究では既存の研究を分析枠組みとして用いた概念主導の方法を採用しているため、先行研究で指摘されていた内容と一致する語が見出された場合には、1つのコードから1つのサブカテゴリーを生成したケースもある。生成したコード、カテゴリーの一覧は表2のとおりである。以下、カテゴリー名を【】、サブカテゴリー名を〔〕、コード名を<>で示す。斜体は分析対象者による語り、()内は筆者による意味内容の補足である。

1. 生活の基盤ニーズ

【生活の基盤ニーズ】は、〔医療・健康管理ニーズ〕、〔経済的安心ニーズ〕、〔住居の安心ニーズ〕から構成される。〔医療・健康管理ニーズ〕は、<身体の不安>と<病院にきちんと行く>という2つのコードから生成した。〔経済的安心ニーズ〕は生活に必要な資金に関する不安から生じるものであり、入院などでまとまったお金が必要になった場合への不安も含んでいる。〔住居の安心ニーズ〕は、本研究では<老人ホームに入居したい>という1つのコードから生成した。健康、お金、住宅と、いずれも独居の高齢者が自立して生活するための基盤となる要素であることから、【生活の基盤ニーズ】と命名した。

表2 「将来を見据えた生活支援ニーズ」カテゴリー、サブカテゴリー、コード一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	語りの例
生活の基盤ニーズ	医療・健康管理ニーズ	身体の不安	「不安だらけだよ。(中略)まず身体だね。」(No.1) 「身体がやっぱしね、一番心配ですよ。」(No.2)
		病院にきちんと行く	「お医者さんにもちゃんと、毎月行くようにして、やっているんですよ。」(No.5)
	経済的安心ニーズ	経済的な不安	「(経済的な不安は)ありますね。だから年金がどうなるかわからないからね。」(No.6)
	住居の安心ニーズ	老人ホームに入居したい	「(老人ホームに)もしかすると、入れたら僕も入りたいね。何にもしなくていいからね。」(No.1)
地域生活支援ニーズ	介護予防ニーズ	身体のために自分で動く	「うちで雑巾縫ったり,そんなのばかりやってます。手をね、あれしないとダメなんです。(中略)やっぱり手ね、動けなくなったら一巻の終わりだしね。」(No.2)
		認知症の不安	「(認知症の)不安は、あります。(中略)もうちょっとしたら、わからなくなってくるんじゃないかなあという不安はあります。」(No.5)
	見守りニーズ	緊急時の不安	「僕が万が一ね。まあ、どうなるか、立てなくなるか歩けなくなるかっていうようなことになった時に、(中略)外から入ってくる人は、鍵がないと入れないわけじゃない。」(No.7)

人生の 統合・ 死後の 安心 ニーズ	生前整理 ニーズ	親族関係の 整理	「お位牌はね. 向こう(配偶者の実家)に返したいしね. (中略) だから一度,私のほうから下手に出て, これを返してね, それをしなくちゃと思って.」(No.2)
		財産処分の 希望	「どうせ使わないあれ, 誰にも予定していないお金っていうの, ない方に多少なりともあげたいっていう. そういうあれ(希望)があるの.」(No.3)
		荷物の整理	「荷物だってこれ片づけないとね. もういつも思うの.」(No.2)
	死後の安心 ニーズ	孤独死の 不安	「ひとりだから不安はあるんですよ. (中略) ひとりで死んじゃったらどうなるんだろうと.」(No.6)
		墓の準備	「そういうお墓のほう, お坊さんに顔出ししておかないとね, 弟だけのあれじゃなくて, 私自体もね.」(No.2)
		葬式や 死後のこと	「姪っ子たちを呼んで, まあ『貯金はこれくらいしかないけど, これで. お葬式なんかはしないで』って. (中略)頼んであるんです. だからそういう, 死んだ後のことはやってくれるっていうこと.」(No.5)

健康管理への個々の意識は高く, <病院にきちんと行く>ことをはじめとして, 調査協力者は自ら工夫して様々な努力をしていた. [住居の安心ニーズ]については, <老人ホームに入居したい>とは思っているものの, 仮に入居を希望したとしてもすぐには入れないだろうというあきらめの声が聞かれた. 以下はその一例である.

「ただでそういうのを希望したって入れないでしょ, 今. すごいでしょ. テレビ見ていたってすごいんだから. (中略) だから倒れてまるつきりもう歩けないと. こういう風になっちゃうと, そういう施設関係で, 入れたり. 強制的にね. もうそれしかないのかなあと, 自分でそう思っているんですよ.」(No. 7)

2. 地域生活支援ニーズ

【地域生活支援ニーズ】は, [介護予防ニーズ], [見守りニーズ] という2つのサブカテゴリーから構成される. [介護予防ニーズ]は, <身体のために自分で動く>という高齢者の意志や希望と, <認知症の不安>から成る. [見守りニーズ]は<緊急時の不安>という1つのコードから生成したもので, 先行研究を参考に, 自分の生活に異変が起きた時, 早期に周りの人たちに発見してもらう必要があることから命名した. これらのニーズは, 独居後期高齢者が心身機能の衰えを感じ始めてからも安心して自宅で暮らし続けるために必要な要素であり, 「より身近な地域での支援」という色合いが強いものである.

<認知症の不安>では, 現在進行形で急速に物忘れが激しくなっていることへの戸惑いが聞かれた.

「人気ある歌手で, 何万人とか, ああいうところでコンサート, 歌うでしょ. その人の名前が出てこないんですよ. それでね, 桑田佳祐?…ね, わかるでしょ. その名前が出てこなくて出てこなくてね. そのぐらい有名な人でもね, 出てこないんですよ. (中略) (ヘルパーは) 買い物終わったらすぐ帰っちゃうし. あと掃除こことね, トイ

レとお風呂とね、掃除してくれるんですよ。それだけですよ。(No. 7)

上の語りからは、物忘れが進むことへの戸惑いを生活援助に入っているヘルパーにも伝えることができず、一人で抱え込んでいる独居後期高齢者の姿が浮き上がってくる。このような状況の中、物忘れが進むことを予防し、独居での生活を維持するため、様々な努力をしていた。

曜日に何か用があるとなるとね、こういう風に貼ってやっておかないと。すぐ書かないと、貼らないと、「こんなものは」と思っているとね、前の感覚なわけにいかないんだよ。忘れちゃうんだよ。それで一生懸命思い出すのにね、思い出せないんだよ。(中略)だからもう、全部名前と時間とね、貼って、すぐにやらないと。うん。(No. 7)

<緊急時の不安>に関連して、次に引用するのは、数年前に姉が浴室で亡くなったために自らの入浴についても大きな不安を抱えたことから、同じ都営住宅に住む友人に入浴の前後で電話をかけることで、見守り手を確保しているという語りである。

下向いてね、頭洗うとか。そういうのがちょっと怖いんです。それで、「私今からお風呂に入るからね」って電話をかけて、その、仲良くしてもらっているお友達に電話をかけて、それでお風呂入って、頭洗ったら、(中略)「お風呂無事に出ました」ってまた電話をすると、「はいわかりました」って言って、そういう連絡をして。で電話長くかかって、「お風呂出たっていう電話が無い時は私ぶっ倒れているからね、見に来て」っていう風に、声かけて。(No. 5)

独居の後期高齢者にとっては自分の身にいつ何が起こるかわからず、すぐ近所で異変を察知し駆けつけてくれる支援者の存在が、在宅生活を安心して送る上では不可欠であることを、上記の語りは示している。

3. 人生の統合・死後の安心ニーズ

【人生の統合・死後の安心ニーズ】は、[生前整理ニーズ]、[死後の安心ニーズ]から構成される。[生前整理ニーズ]は<親族関係の整理><財産処分の希望><荷物の整理>という3つのコードから生成した。いずれも平均寿命に近い年齢を迎え、死を身近なものとして意識し始めたことに伴い、自らの身边を整理しようという心境に関わるものである。このうち、<親族関係の整理>は先行研究で明確に記述されていたものがなく、本研究で帰納的に生成したコードである。[死後の安心ニーズ]は<孤独死の不安><墓の準備><葬式や死後のこと>という3つのコードからなる。【人生の統合・死後の安心ニーズ】という命名の由来は、Eriksonら(=1990:57-77)に拠るものである。老年期において身边を整理したり自らの死後のことを意識し始めたりすることは、それまでの生き方を振り返って意味づけ、死をもって人生を完成させるという発達課題「統合対絶望」に関わる生活行動として捉えられると考えた。

以下の語りは<孤独死の不安>について、ある程度仕方ないものと覚悟しつつも、発見が遅れることで周囲の住民に迷惑がかかることを心配するものである。

希望はねえ…とにかく希望よりも一人だからね、なんかここであった時に、このままいったときに、すぐに見つかればいいけど、見つからないと、ここの人たちに迷惑かけたくないと思うけどねえ。だからそれがいつも心配なのよ。(中略) 孤独死でもすぐ見つかってくれてね、まああとは私は野となれ山となれだけど。やっぱり皆さんに迷惑かけたくないのですね。(No. 2)

一方、一人で亡くなること自体への強い不安を述べる声もある。

(子どもは)いない、いない。だから一人だから不安はあるんですよ。いや、先行き。先行き、あの…ひとりで死んじゃったらどうなるんだろうと。(No. 6)

上記の語りを含め本研究で特徴的だったのは、子どもがいないために自らの死後のことを心配する声が多く聞かれたことである。例えば、ほかに以下のような語りがある。

私はほら。あれがないから。あの、子どもがいないから。親の…お寺へ、入れるわけなんですよ。ところがね、誰かその、私の甥っ子のね、誰か知り合いかなんかに、「おじさんは、それはダメだ」って。(中略) どっかから聞いてきてね、そりゃダメだって言ってね。それで、私の家内も未だにね、お寺で住職が預かってきている。(No. 4)

具合が悪くなったり、まあいわゆる病院に入るとか、その先命落とすとかになると、誰がどうする、どうなるのかなと。いわゆるBさん(地域包括支援センターの職員)のほうで、(中略)…最終的に。そういう面倒見てくれるのかな。(No. 7)

死後の安心を得るため、自ら積極的に行動した者もいる。以下は、配偶者を看取った後に自らの死後のことについて不安をもち、あらかじめ様々なことを準備して姪に伝えてあるという語りである。きっかけは葬儀屋から「帳面」の存在を教えてもらったことだった。

子どもがいないから、自分が死んだときにどういう風にしたらいいのかっていうのが心配だったんですよ。(中略) 孤独死とか何とかって、一人になるといろんなことが起きたらいけないから。「ちゃんと頭がまだしっかりしている間に言っておいたほうがいいんだけど」って言ったら、そういう帳面みたいなものを下さって、でそれに遺言みたいのを書いて、自分が死んだらこういう風にしてくれって言うことを書いたり、それからまあ、財産なんかないですけど、それはこんな風にして下さいっていうことを、ちゃんと書いておいたほうがいいんじゃないですか、そのお葬式屋さんが、ちゃんと教えてくれたんです。(No. 5)

その後、関係良好な姪たちに依頼をすることで、このケースでは死後の安心を得ていた。

ただ子どもがいないから、いろんなこと心配して、そうやって自分で考えて、いろんな人をお願いしたり、姪っ子たちを呼んで、まあ「貯金はこれくらいしかないけど、これで、お葬式なんかはしないで」って。(中略) お骨にして、ちゃんと実家のお墓

に入れてちょうだいって、頼んではあるんですけどね。(No. 5)

VI. 考 察

1. 「人生の最期まで」の見通しをもたらす生活支援

本研究では、独居後期高齢者本人が感じる不安を、近い将来自らの身に訪れ得る危機に対する認識の表れと考え、その裏側に想定できる「できればこうありたい」という希望とともに「潜在的ニーズ」として捉えることで、これらを広義の生活支援の対象と見なした。特に、独居で子どもがいなかったり、交流が断絶していたりする家族状況や、きょうだいや友人との死別を数多く経験してきた後期高齢期というライフステージの特性からか、自分の死や死後のことを強く意識した生活支援のニーズが引き出されたことに、本研究の特徴がある。

独居後期高齢者の生活を将来にわたって支える上で、まず必要なのは【生活の基盤】を整えることである。先行研究で言われていた「住宅の不安」(直井 2005 ほか)は、本研究では聞かれなかったが、これは調査対象者の多くが都営住宅や持家に住んでいたためであると考えられる。「年金だけで生活しなきゃならないので、あそこ(都営住宅)は出られないです」(No. 5)といった語りからは、住居面と経済面の問題は密接につながっていることが伺える。将来的に健康が衰えてきた時、現在の家に住み続けられるかどうかということも、多くの者が抱く不安である。「人生の最期まで」を見据えて独居後期高齢者の生活支援を考える際、〔医療・健康管理〕〔経済〕〔住居〕という3つの要素は互いに絡まり合うものとして、包括的に捉える必要がある。

一方、いかに健康管理に気を配っていても、加齢による心身機能の低下を完全に押しとどめることはできない。このような加齢に伴う心身の変化に対し、取るべき対策の方向は2つある。1つは<身体のために自分で動く>ことで、少しでも心身機能を維持できるよう〔介護予防〕に努めることである。近年では身体機能の維持にとどまらず、<認知症の不安>に対し、運動や脳機能のトレーニングを組み合わせることで、もの忘れの進行を予防する様々な取り組みも注目を浴びており、高齢者自身の関心も高まっているところである。いま1つの対策は、<緊急時の不安>に対応できるよう、ごく身近なところに〔見守り〕を行ってくれる存在を確保することであり、本研究の対象者のように、血縁によるサポートが多くても月に1回程度という独居の後期高齢者達にとっては、信頼の置ける近隣住民や日常的に来訪するヘルパーが、見守り手として重要な役割を果たすことになる。なお、認知症については2015年1月に発表された「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」において、「発症予防」とともに「早期診断・早期対応のための対応整備」が掲げられている(厚生労働省 2015)。「これ、認知症かな?」(No. 7)という当事者が抱える潜在的な不安に周りの者がいち早く気づき、今後の生活方針を相談して共に築き上げていくような支援が、独居の後期高齢者本人にとっても、その生活を支援する周囲の者にとっても、事態を対応困難となるほどに悪化させないために必要である。

2. 「人生の最期」から「死後」までを見据えた生活支援

これまで「生活支援」と言えば、買い物や家事、通院、外出、あるいは電球の交換とい

った、日常的な生活困難への対応という側面が強かった。河合(2009:118)が東京都港区のひとり暮らし高齢者調査を通じて描き出したのも、そうした生活上の困り事である。このような先行研究の延長線上で、「将来」に焦点を絞ってインタビュー調査を行った本研究では、＜親族関係の整理＞＜荷物の整理＞＜墓の準備＞＜葬式や死後のこと＞といった、人生の最期から、さらには死後のことまでを意識したニーズが抽出される結果となった。この点を踏まえれば、①本研究の対象となった後期高齢者にとっての「将来」とは人生の最期のみならず、「死後」までを含む概念であること、②独居後期高齢者への生活支援を考える際、これら死後のことまでを考えていく必要があること、を指摘できるだろう。

＜孤独死の不安＞は、多くの独居高齢者が抱える不安の1つである。結城(2012:19-20)は生命維持を最優先に考えた「積極的な対策」が孤独死対策の根本であることを述べつつ、その限界も認め、公衆衛生の観点から孤独死を早期に発見する「消極的な対策」も同時に考えていく必要を指摘しているが、本研究で高齢者本人の口から語られた内容も、同様の考え方に拠るものと言える。前項で述べた見守り手の確保は、独居の後期高齢者が自分の死後のことに関して抱えている不安を、一定程度軽減する可能性を有している。

＜葬式や死後のこと＞については、袖井が指摘したような「死や死後といった、もっと先までの設計図を自分で描くこと」を、「自分で考えて」(No.5)実践しているという語りが聞かれた。その強い動機となったのは、「子どもがいないから」であった。独居高齢者のみを対象としたものではないが、“配偶者がいない女性”や“子どもがいない人”で、人生の終わりに向けた準備を進めようとする意識が強いという指摘(小谷2006)や、判断能力低下への不安が事前計画(準備)と関連しているとする研究(早川・杉澤2008)もあり、上記ケースもこれらの条件にあてはまっている。このような意識がどのように生じてくるかを明らかにすることは今後の課題である。

このように「人生の最期」から「死後」に関わる潜在的ニーズが数多く抽出されたのには、前述のように、後期高齢者というライフステージを迎えた者の心情が関わっていると考えられる。本研究の対象者も「死んじゃったね、みんな。(中略)みんな7,80くらいか、70ちょい。80代なんてあまりいないね」(No.1)、「きょうだいね、妹たちは亡くなっちゃって。みんなね、妹の旦那の人なんかみんなね、死んでますね」(No.3)といった語りで見られるように、ほぼ例外なく、きょうだいや友人との死別を経験していた。特に同世代の友人や、自分より年の若いきょうだいとの死別は、やがて訪れる自らの死とも否応なく向き合わされる体験であったようである。

地域包括ケアシステムが標榜するように「自分らしい暮らしを人生の最期まで」続けるため、独居の後期高齢者が抱える日常的な困難を解消するための生活支援は、言うまでもなく重要である。しかしそれに加えて、このようなライフステージを迎えた人たちの様々な喪失体験と心情を汲み取り、「人生の最期」から「死後」までを含めた生活支援の体制を確立することもまた、重要な課題であることが、本研究の結果から示唆される。

Ⅶ. 結 論

本研究では多くの高齢者が「日常生活に満足」と答えながらも「将来に不安」を感じている現状に注目し、独居後期高齢者が潜在的に抱えている「将来を見据えた生活支援ニーズ」を明らかにすることを目的に、本人たちが語る不安と希望を分析した。その結果、①

健康、お金、住居といった【生活の基盤】に関わるニーズ、②介護予防や見守りなど、より身近な地域での【地域生活支援】に関わるニーズ、③人間関係・財産・所持品といった身の周りの整理や、お墓・葬儀など死後のことまでを見据えた【人生の統合・死後の安心】に関わるニーズという、大きく3つの生活支援ニーズを見出すことができた。

最後に本研究の限界を述べる。本研究はインタビュー調査による探索的質的研究である。都市部の限られた地域における調査であり、対象者も少なく、またサンプリングに偏りが見られることから、結果を一般化することはできない。本研究で生成したカテゴリー間の関係性の検討も含めて今後、性別や独居年数、子どもの有無、ソーシャルサポート、地域差等に注目しながら、量的調査によって検証していく必要がある。

本研究の対象は地域包括支援センターの支援を受ける要介護高齢者であるが、一般の高齢者も年を重ね、配偶者や血縁との死別を経験することになれば、同様の状態に陥る者も少なくないだろう。社会保障財政が厳しさを増す中、これら的高齢者が抱える様々なニーズに対し、どのような体制をもって応じていくかも大きな課題である。いずれも今後の研究課題としたい。

付記 本研究の一部は日本老年社会学会第56回大会にて発表した。本稿は日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科に提出した修士論文を一部加筆・修正したものである。

謝辞 本研究の調査にご協力いただいたA地域包括支援センターの皆様、およびインタビューにご回答いただいた高齢者の皆様に、心より御礼を申し上げます。

引用文献

- 荒木亜紀・堀内ふき・浅野祐子 (2010) 「地域在住高齢者の終末期の過ごし方の希望とその準備に関連する要因の検討」『日本在宅ケア学会誌』14 (1) , 78-85.
- 地域包括ケア研究会 (2013) 『地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点』.
- Cho, J. Y. and Lee, E. -H. (2014) Reducing Confusion about Grounded Theory and Qualitative Content Analysis: Similarity and Differences, The Qualitative Report, 19(32), 1-20.
- Elo, S. and Kyngäs, H. (2008) The Qualitative Content Analysis Process, Journal of Advanced Nursing, 62(1), 107-115.
- Erikson, Erik H., Erikson, J. M., and Kivnick, H. Q. (1986) *Vital Involvement in Old Age*, W. W. Norton & Company. (=1990, 朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期 生き生きしたかわりあい』みすず書房.)
- 古川孝順編著 (2007) 『生活支援の社会福祉学』有斐閣ブックス.
- 早川美津子・杉澤秀博 (2008) 「要介護高齢者の判断能力低下への事前計画に関連する要因」『老年社会科学』30(1), 47-57.
- 平岡公一 (2011) 「社会福祉とニード」平岡公一・杉野昭博・所道彦・鎮目真人『社会福祉学 =Social Welfare Studies— Social Policy and Social Work』有斐閣, 423-436.
- 河合克義 (2009) 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社.
- 経済産業省 (2012) 『安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けた普及開発に関する研究会報告書』

- (<http://www.meti.go.jp/press/2012/04/20120426006/20120426006-3.pdf>, 2015. 5. 21) .
 小泉美佐子・伊藤まゆみ・宮本美佐 (1999) 「青年期の看護学生と高齢者の希望の比較に関する研究」『群馬保健学紀要』20, 103-112.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2014) 『日本の世帯数の将来推計 (都道府県別推計) ——2010 (平成 22) 年～2035 (平成 47) 年』
 (<http://www.ipss.go.jp/pp-pjsetai/j/hpjp2014/houkoku/houkoku.pdf>, 2015. 5. 21) .
- 小松理佐子 (2011) 「地域生活支援のニーズと充足方法」『日本福祉大学社会福祉論集』124, 39-54.
- 小谷みどり (2006) 「古い支度に関する意識と実態」『ライフデザインレポート』173, 4-15.
- 厚生労働省 (2014) 「地域包括ケアシステム」
 (http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/c_hiiki-houkatsu/, 2015. 5. 21) .
- 厚生労働省 (2015) 『認知症施策総合推進戦略 (新オレンジプラン) ～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～』
 (http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyak_utaiboushitaisakusuishinshitsu/02_1.pdf, 2015. 5. 21) .
- 小山尚美・流石ゆり子・河野由乃・ほか (2009) 「過疎農山村地域に暮らす後期高齢者の現在および今後の生活に対する思い——Y 県 A 町のひとり暮らし高齢者へのインタビューから」『山梨県立大学看護学部紀要』11, 27-37.
- 松成恵 (2003) 「家族と介護——独居後期高齢者事例研究」『山口県立大学生生活科学部研究報告』28, 47-56.
- Mayring, P. (2000) Qualitative Content Analysis, Forum: Qualitative Social Research, 1(2), Art. 20,
 (<http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/1089/2385>, 2015. 5. 21) .
- 内閣府 (2010) 『「平成 21 年度 高齢者の日常生活に関する意識調査」結果』
 (<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/sougou/zentai/index.html>, 2015. 5. 21) .
- 直井道子 (2005) 「都市における老後の不安」『季刊社会保障研究』41 (1) , 12-21.
- 新潟市中央区社会福祉協議会・新潟県立大学 (2011) 『新潟市中央区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書』.
- 乙幡美佐江 (2014) 「ソーシャルワーク研究における質的内容分析法の適用」『社会福祉学評論』13, 1-16.
- 清水浩昭 (2011) 「統計ウォッチング——社会統計 孤独死への不安感」『統計』62 (3) , 35-40.
- 袖井孝子 (2009) 『高齢者は社会的弱者なのか——今こそ求められる「老いのプラン」』ミネルヴァ書房.
- 武川正吾 (2011) 『福祉社会——包摂の社会政策』有斐閣.
- 東京都福祉保健局 (2010) 『第 5 期東京都高齢者保健福祉計画』
 (<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kourei/shisaku/koureisyaikaku/05keikaku2426/05keikakupdf.html>, 2015. 5. 21) .
- 結城康博 (2012) 「社会問題としての孤独死」中沢卓実・結城康博編著『孤独死を防ぐ——支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房, 1-24.

Research on the Daily Living Needs of Elderly Aged 75 or Over Living Alone with Perspectives for the Future

Yui SATO

Facing the aged and high death rate society, Japanese Integrated Community Care System aims at constructing the packaged service organization including “the end of life care” for the elderly. This article explores the latent daily living needs of the elderly aged 75 or over living alone with perspectives for the future, from the narrative on their anxiety and hope, by focusing on the concept of “livelihood support” which are the important element for Integrated Community Care System.

Analyzing the personal interview result data compared with preceding studies, 3 major needs were found. That is, 1. needs for foundation of daily life, 2. needs for community livelihood support, 3. needs for a sense of integrity and a peace after the death. For the elderly 75 or over living alone, the concept of “future” includes even the period from the end of life to after their death. The experiences of bereavement of their friends or sibling of the same generation seem to have a great influence on such a sense of elderly. The result suggests the necessity of constructing livelihood support system not only for the present difficulty of daily life but also for the affairs after one’s death.

Key Words : Elderly aged 75 or over living alone, Daily living needs,
Anxiety, Hope, Qualitative content analysis